



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3260号 2016.9.17 発行

カレンダーで「見える化」を 障害のある子に苦手なお金管理



中日新聞 2016年9月16日
 使う日のポケットに硬貨を入れるお金カレンダー。計画が目に見えて理解しやすい

発達障害や知的障害のある子どもは、お金を管理し、計画的に使うのが不得手といわれる。ほしいものを店頭などで見かけると、いくつも手に入れたくなることが多いためだ。だが、使えるお金を見えるように工夫したカレンダーによる教え方が効果を上げている。

◆「いつ」「いくら」を一目で

京都市に住む住山志津枝さん(42)の長男(9つ)は、五歳のころに自閉症スペクトラムと診断された。お金に関する問題は、長男が保育園児のころから頻発した。

親子で公園に遊びに行き、池のコイに与えるえさを百円で買ってあげると、長男は喜んで与えた。でも、えさがなくなると「もう一回やる」と言ってきかない。

仕方ないので再度購入したが、その後も「まだやる」と言い続けたため、結局千円使った。それでも長男は「もう一回、もう一回」と泣き叫んで暴れ、仕方がないので抱きかかえて帰った。その後も同じようなことを何度も繰り返した。

住山さんは悩んで、社会福祉法人大阪府障害者福祉事業団(大阪府富田林市)職員の鹿野佐代子さん(52)に相談すると、「お金には限りがあることを教えてあげて」とアドバイスを受けた。長男のお金トレーニングの場は、小学校入学後にやってきた。

親子で地元の夏祭りに行く際、お小遣いとして千円札を渡した。「これがなくなったら終わりだからね」。住山さんが念を押すと、長男は「分かった」と返事。自由に使わせたところ、大好きなポップコーンの店を見つけるまで、お金を使わず露店を通り過ぎることができた。

以前なら、目に入った店ごとに飛び付いて「かき氷」「ジュース」と食べられなくても買いに走ってしまっていたのに。住山さんは「意識が違って驚いた」と話し、長男の成長を実感したという。



鹿野佐代子さん

今年七月、「障がいのある子のお金トレーニング」(翔泳社)を共著で出版した鹿野さんは「発達障害の子は、親の財布からはどんどんお金が出てくると思っていることが多いです」と話す。そんな子にしっかり教える必要があるのは、「お金は有限なこと」だ。

教えるための道具として、鹿野さんが開発したのがお金カレンダー。布製の壁掛けカレ

ンダーに、硬貨を入れるためのポケットを一日ごとに付けた。使い方は、子どもにお小遣いを十円や五十円などの細かい硬貨で渡し、使う予定がある日のポケットに硬貨を振り分ける。子どもはその日に、ポケットから財布に移して使う。

「お金が今いくらあるのか、どれだけ使う余裕があるのか、いつ使うのかの計画が全部目に見えて、理解しやすいんです」と鹿野さん。これがお金の管理能力を育てることにつながる。

大切なのは、使ってお金がなくなっても、追加で渡さないこと。追加で渡す場合にはお手伝いをさせて、お駄賃としてあげるといいという。こういった経験の積み重ねが、お金は使えばなくなり、うまく使わないと後で悲しい思いをすることが実感として分かる。

鹿野さんによると、失敗を恐れてお金を持たせないようにしている親が多いという。だが「子どものときなら失敗しても少額ですませられる。使わせて管理する能力を育ててほしい」と話す。(寺本康弘)

障害者支援 経験を出版

読売新聞 2016年09月15日



◇近江学園職員が「段取り八分」

◇職業教育や課題取り組みなど

知的障害児らの入所施設「県立近江学園」（湖南市東寺）の職員、吉田巧さん（41）が職業教育や、就労支援の経験をまとめた「段取り八分」をサンライズ出版（彦根市）から自費出版した。吉田さんは「重要なのは指導する側が地道に、根気よく取り組むこと。障害者支援はもちろん、職業教育に携わる人の参考になれば」と話している。（生田ちひろ）

子どもたちの木工作品を前に著書を手にする吉田さん（湖南市で）

吉田さんは2001年から同学園に勤務。これまでに木工科の担当として、ものづくりを通じて子どもたちを指導し、08年からの5年間は主任を務めた。現在は重度障害児の生活支援に関わる。

「段取り八分」は、今から5年ほど前、部下の育成に悩んでいた友人が、吉田さんの仕事に興味を持ったことがきっかけで出版を思い立ったという。

主任時代の経験を中心に執筆。タイトルは「仕事は段取りが万全なら8割が終わったも同然」という意味で、木工科で肝要とされる言葉を使用した。内容は、子どもたちの一日の生活や、毎月の個別面談で仕事を振り返る様子、職場実習などについて記している。

自らの経験から、「社会で働くには、仕事力、社会性、生活力、豊かな心の四つが必要と痛感した」と吉田さん。毎朝、子どもたちの言動を通じて、課題に向き合う姿勢が整っているか観察。「あいさつをしよう」「身だしなみを整えよう」などと具体的に呼び掛けたという。

また、課題に取り組む際にも、指示通りの方法で集中できているかどうかを確認。表情が曇っていたり、疲れを見せていたりすれば、「原因を丁寧に探ることが大切」としたためた。

吉田さんは「心が満たされて、初めて健康的な生活を送る意欲や自制心が生まれ、それが社会性を育み、仕事に結実する」と話す。本には、その思いを反映させたという。

四六判、195ページ。1300円（税抜き）。近江学園で販売しているほか、県内書店で注文を受け付けている。

◇近江学園 「障害者福祉の父」といわれる糸賀一雄氏（1914～68年）が戦後間もなく設立。教育として木工や窯業などの製作や造形活動を重視し、知的障害のある、原則18歳以下の男女が入所する。木工科では15～18歳の入所者が糸のこや機械を使って椅子や台、小物を作り、心理、技術両面で、社会で働く態勢を整えられるよう支援する。

発達障害見守り 松島をモデルに

河北新報 2016年09月16日

発達障害の可能性のある子どもへの接し方を学んでもらおうと、宮城県は松島町をモデル地区に設定し、保護者や保育士、幼稚園教諭らを対象にした支援事業に取り組んでいる。

松島町の児童館を兼ねた子育て支援センターを拠点に町内の保育士や幼稚園教諭、保健師らへの座学や事例研修を実施。9月末からは小学校入学前の子どもと保護者を交え、「のびっこクラブ」と銘打った教室を5回ほど開催する。

保護者は育児の悩みなどを相談し、保育士らは子どもと直接触れ合いながら適切な関わり方を学ぶ。現職の保育士や幼稚園教諭が教室に参加しやすいよう、勤務先の保育施設に退職した保育士や幼稚園教諭を代役に充てる仕組みも整えた。

取り組みは本年度、厚生労働省のモデル事業に採択された。放課後デイサービスなど関係機関でつくる支援検討会が松島町を推薦し、県が町に協力を求めた。専門機関がなくとも、地域で子どもの成長を育み、能力を伸ばすことができる環境づくりを目指す。

発達障害は自閉症や学習障害、注意欠陥多動性障害などの総称。周囲とうまくコミュニケーションが取れないなどの困難を伴う。文部科学省の調査では、全国の小中学生の6.5%が該当する可能性がある。

早くから本人に合った支援をすれば発達を後押しできるが、適切な支援を受けられないまま成長するケースも少なくない。周囲に否定されるなどして自己肯定感を失う「二次障害」が起こることもある。

県障害福祉課の担当者は「障害というと抵抗を感じる保護者もいるかもしれないが、早期に適切な対応を促す子育て支援の一環と考えてほしい。個性や多様性に応じた子育てができるよう、教室を広く学びの場にしたい」と話す。

障害＝感動？ 「24時間テレビVSバリバラ騒動」、NHKにはNHKの考え方が…」と読売テレビ編成局長

産経新聞 2016年9月15日

読売テレビの秋の番組改編説明会。同局の小石川編集局長（右）と松本編成部長＝15日、大阪市中央区



読売テレビは15日、秋の番組改編説明会を行い、小石川伸哉編成局長は8月28日に放送されたNHK・Eテレの障害者の情報バラエティー番組「バリバラ」（日曜午後7時）と「24時間テレビ」（日本テレビ系）との騒動に関して、「NHKさんの1つの考え方と捉えている」と言及した。

Eテレ姿勢に「チャレンジ的な企画。われわれも注目している」

8月28日放送の「バリバラ」は、「検証！『障害者×感動』の方程式」と題し、障害者と感動を結びつけることに疑問を投げかけるという内容。同日は、日テレ系「24時間テレビ 愛は地球を救う」と重なったため、「Eテレが本気出してる」「Eテレ攻めすぎでしょー」などとネット上で騒動となった。

小石川局長は「NHKさんにはNHKさんの考え方があるので、特にどうこういうことはない」とし、Eテレの姿勢に対し、「チャレンジ的な企画をされており、われわれも注目しています」という見解を示した。また、「いろんなご意見があるとは思いますが、視聴率もよく、賛同の声もいただいた。番組のコンセプトとして、しっかりやれたと思います」と続けた。

一方、「バリバラ」を放送したNHK大阪放送局は、ネット上での騒動について「福祉番組に関心はなかった方にも、一定程度の関心は持ってもらえた」とし、「他局の番組内容についてどうというわけではなく、あくまで通常通りの放送」という見解だった。

強敵「ドクターX～外科医・大門未知子～」に対抗

読売テレビは関西地区で2年連続視聴率3冠を獲得しており、秋は大きな改編の予定はない。「この秋は『ドクターX～外科医・大門未知子～』（ABC系）という強敵があるので、がんばります」と木曜のゴールデンタイム（午後8時の「秘密のケンミンSHOW」、午後9時の「ダウンタウンDX」）に注力したいと語った。

9月29日スタートの木曜ドラマ「黒い十人の女」（木曜午後11時59分）は、1961年公開の同名映画（市川崑監督）をマルチな才能を発揮している芸人のバカリズムが現代版にアレンジした。主演は船越英一郎で、55年前の映画では父親の船越英二が演じた。今年は芸能界でも不倫問題が続き、話題性としては十分だろう。

自閉症原塚さん細密画巧み



長崎新聞 2016年9月15日

原塚さんが描いた架空の街並み。小学時代からA3サイズに鉛筆で描き続けているシリーズ作の一つ

自閉症の原塚祥吾さん（21）＝五島市新港町＝が描く絵が、市内外で話題だ。フリーハンドで引くきれいな直線や巧みな曲線で生まれた遠近感など、年齢を重ねるごとに繊細さは増している。手先の器用さだけでなく、記憶力や計算力、音感なども優れ、母の由美子さん（51）は「自閉症といっても個性や能力はさまざまある。それぞれに多くの可能性を知ってほしい」と話す。

生後、言葉が出るようになるのは遅かったが、3歳を過ぎると何の問題もなく会話できた。ただ、数字や文字に異様なほど強い関心を抱き、不快な音に敏感に反応して泣くなど、他の子と比べて「気になる部分はあった」（由美子さん）。市立福江小1年時に医師から自閉症だと告げられた。

繊細なタッチで絵を仕上げている原塚さん＝五島市東浜町1丁目

市立福江中では特別支援学級に入り、卒業後は県立鶴南特別支援学校五島分校高等部に進学。中学時代から徐々に言葉に詰まるようになって会話も難しくなるなど、つらいこともたくさんあったが、由美子さんは「好きなことを自由にさせて、伸ばせる場所を伸ばしていこう」と前向きに考え続けた。

秀でた能力は幼少期から光っていた。一度耳にしたメロディーを楽譜を見ずに奏でたり、他人の生年月日を聞いてその曜日を当てたり。ときには「 $100 \div 16 \cdot 2 \times 60 \times 60 = 22222 \cdot 2 \dots$ 」など、答えが規則的になる式をひたすら考え書き続けることもあった。由美子さんはそうした紙や記録を今も大切にファイルに保存している。

その中で最も多いのが、5歳ごろから夢中になっている絵画。五島市内のなじみの場所や家族で出掛けた旅先での景色を鮮明に記憶し、家に帰って忠実に再現したり、お気に入りの道路や風景を自由に組み合わせて架空の街並みを描いたりと多種多様だ。難解な迷路などもいとも簡単に仕上げる。その実力が認められ、小学6年から現在まで、数々の作品が発達障害の専門情報誌に連載されている。

市内では東浜町1丁目のカフェレストラン「たゆたう。」で9月末まで作品の一部を展示中。由美子さんは「一言で自閉症といってもまだまだ分からないことがたくさんある。この子がありのままに描いた作品を見て何かを感じ、障害への理解が少しでも深まれば」と話している。



モリナガに厚労大臣賞 障害者雇用「優良事業所」 佐賀新聞 2016年09月15日



商品を棚に補充する古賀亮祐さん。スーパーモリナガでは、障害の軽い人から重度の人まで30人が幅広い業務を担当している＝佐賀市内

佐賀、福岡に11店舗を展開するスーパーモリナガ（佐賀市、堤浩一社長）が、障害者雇用の優良事業所として厚生労働大臣表彰を受けた。知的、精神、身体の障害がある30人が働き、全従業員に占める割合は4・4％と法定の2％を上回る。障害の程度や適性に応じて仕事を振り分け、給料も健常者と変わらず一律にするなど、障害の有無にかかわらず分け隔てなく働ける環境整備に努めている。

30～40代を中心に障害の軽い人から重度の人までがレジや品出し、調理など幅広い業務を担当している。知的障害のある古賀亮祐さん（20）＝佐賀市＝は「人が好きで、接客の仕事をしたかった」と、鳥栖市の特別支援学校を経て入社。商品の陳列業務を担当しながら客の問い合わせに笑顔で応え、「毎日が充実している」と話す。

同社が障害者雇用に積極的に乗り出したのは約10年前。法定雇用率に満たない一方、支援学校などからの要望は強く、「健常者と同じように、働いてお金を稼ぐ当たり前の生活ができる環境を整えようと考えた」と堤社長。当初は障害者の対応に不慣れなため戸惑う社員も多かったが、人件費を別枠で負担するなどして雇用を進めてきた。

一度の指示で仕事を覚えられなかったり、ごみを捨てる場所を間違えたりする社員に対しては、仕事内容を目につく場所に掲示するなど工夫。そうしたノウハウを各店で共有することで取り組める仕事が増え、昇給した社員もいるという。

一方、知的障害のある人の中にはとっさの応対ができない人もおり、「愛想が悪い」などと苦情が寄せられることも。総務課の阿部一博係長は「そうした声を恐れ、障害のある社員を接客業務から外してしまえば、成長につながらない」と話す。顧客にも障害への理解を深めてもらいながら、長く働き続けられる環境づくりを模索している。

県内企業で大臣表彰を受けたのは36社目。小売業では1991年度の佐賀玉屋（佐賀市）に続いて2社目となった。

障害者が作った雑貨を販売 きょう「KURUMIRU」都庁店がオープン



東京新聞 2016年9月15日
内覧会で店内の商品を見る小池百合子知事（右）＝都庁で

障害者の就労を支援する事業所で作った雑貨を集めた店「KURUMIRU（くるみる）都庁店」が十五日、新宿区の都庁都民広場地下一階にオープンする。アクセサリーや食器、バッグなど都内百二十一事業所の製品約六千点をそろえ、手作りの魅力を発信する。（北爪三記）

店名は、店に来て実際に商品を見たり、触れたりすることで作り手のこだわりを感じてほしい、と命名。雑貨店の運営ノウハウを持つ事業者に、都が店舗運営を委託した。

商品を出しているのは、通常の事業所で働くのが困難な障害者が、雇用契約を結ばずに働く「就労継続支援B型事業所」。

都内に七百カ所以上あるが、多くの事業所で製品の販路拡大がネックになっている。都が常設店を構えることで多くの人に製品を見てもらい、さらなる販路にもつなげる。

十四日には内覧会があり、小池百合子知事も訪れた。店内に足を踏み入れるなり、カラフルな雑貨の数々に「かわいい」と声を上げた。製品を出品した事業所の施設長らに「きれいな色ですね」などと声を掛け、バッグや手提げ袋などを購入した。

十五日は都民広場で午前十一時～午後四時にオープニングイベントが開かれ、福祉施設で作ったパンやスイーツの販売や製品作りの体験コーナーなどがある。営業時間は十五日が午前十一時半～午後六時半、通常は午前十時半～午後六時半。土日、祝日定休。

英TVのpara番組出演、6割が障害者 負傷兵らも活躍 共同通信 2016年9月15日
リオデジャネイロ・パラリンピックで輝くのは選手だけではない。前回ロンドン大会を大成功させた英国で今大会の中継を担うテレビ局「チャンネル4」は司会や試合解説などに障害者を積極的に起用し、注目されている。

英紙ガーディアンによると、同局が放送するパラリンピックの番組に出演する6割、映像編集などを行う画面に写らない部門の約15%が障害者。番組に登場するのは元選手だけでなく俳優、アフガニスタンで負傷した元軍人ら顔ぶれも多彩だ。

7日の開会式中継には2004年にサウジアラビアで取材中に銃で撃たれ、現在は車いす生活を送るBBC放送の男性記者を抜てきた。

同局はロンドンの地下鉄駅などに巨大なポスターを張って大会の盛り上げに一役買っている。広告では身体障害を意味する英語「DISABILITY」のDISの部分に線を入れ、能力や才能を意味する「ABILITY」に。

「私たちは超人」と題した同局のパラリンピック宣伝動画もインターネット上で人気を博し、14日までに640万回以上、再生された。

英国では、BBCが幼児向けチャンネルに片腕のない女性司会者を起用するなど、パラリンピック番組以外でも多様性を意識した番組づくりをする例が目立つ。(共同)

半身まひの男性が介護事業 障害者の自立後押し 神戸新聞 2016年9月16日



壁に描かれたシンボルツリーの前に集まる「ぷらす」のスタッフら＝小野市檜山町
生活介護事業を始めるために新設した浴室のリフトを操作する畑山哲人さん＝小野市檜山町



左半身まひなどの障害がある畑山哲人さん(43)＝兵庫県三木市志染町井上＝が理事長を務め、小野市檜山町で就労継続支援B型の作業所を運営してきたNPO法人「ベンチマークぷらす」がこのほど、障害者に入浴やトイレの介護、創作活動の機会などを提供する生活介護事業を始め、多機能型事業所「ぷらす」として生まれ変わった。

畑山さんは2010年に脳出血に倒れ、高次脳機能障害などが残る。就職できず苦労した経験から、三木市内に作業所を昨年7月に開設。今年6月には特別支援学校の元校長から借りた民家を改装し、現在地に移転した。

生活介護事業を始めたのは「支援区分の比較的軽い人の自立を促すことで、作業所に行けるようステップアップしてほしい」との願いから。リフト付きの浴室を備え、トイレも車いす仕様にした。介護福祉士やヘルパー、看護師らも雇った。

利用時間は月～金曜の午前10時～午後3時半。18～65歳が6人まで利用でき、送迎もある。同法人TEL0794・60・2766(大島光貴)

リオパラ競泳・田中選手2連覇ならず 力泳に「ガンバレー」 東京新聞 2016年9月16日

リオデジャネイロ・パラリンピック競泳の男子100メートル平泳ぎ（知的障害）で、田中康大選手（26）＝千葉県美浜区在住＝は惜しくもメダルには届かなかったものの、見事、四位入賞を果たした。前回大会で金メダルを獲得し、プレッシャーのかかる中での四年間の頑張りに、田中選手が通う習志野市の就労支援施設「あかね園」の利用者らは温かい拍手を送った。

あかね園の食堂では十五日、昼休みに利用者ら約八十人がレースを録画で観戦した。絵が得意な田中選手がデザインしたTシャツ姿の人もいて「ガンバレー」と声援。ゴールすると拍手して健闘をたたえた。

田中選手は、前回（二〇一二年）のロンドン大会で世界新記録（1分6秒69）で金メダルを獲得。同年に県民栄誉賞を受賞した。イベント出席や取材対応が増え、町中やプールで声をかけられるようになった。

田中選手のレース後、拍手して健闘をたたえるあかね園の利用者＝習志野市で



だが、自閉症で人と接するのが苦手な田中選手にとっては、人々から注目され、生活環境が変わったことがストレスになった。あかね園施設長の松尾公平さん（41）は「イライラすることがあり、水泳を辞めたいと思った時期があったようだ」と語る。それでも一日六～七時間の練習や母親のサポートで本来の泳ぎを取り戻した。

決勝での1分7秒82はロンドンの自己ベストに1秒ほど及ばなかったが、コーチを務める気愛水泳塾の榎本仁さん（54）＝市川市＝によると、過去三番目に速いタイムで、七月の大会から約5秒も縮めたという。榎本さんは「彼らしく大舞台で強さを発揮してくれた」と語り、四年間苦しんだ末に好タイムを出した努力をねぎらった。

松尾さんは「インタビューで悔しがっている姿が印象的だった。次への力になる」とさらなる活躍を期待した。田中選手は十七日（日本時間）の男子200メートル個人メドレー（知的障害）予選に出場する。（村上豊）

ボッチャ挑戦 「面白いぞ」 西九州大生が体験教室 西日本新聞 2016年09月15日



ボッチャをする西九州大のサークル「ESRD」の学生用具の白いジャックボール（目標球）と赤、青のボール勾配台で転がす場合は補助者がコートに背を向け、投球者の指示で角度や高さを調節する

リオデジャネイロ・パラリンピックで日本代表チ



ームが銀メダルに輝いた「ボッチャ」。あまり聞き慣れない障害者スポーツだが、佐賀県内では西九州大のボランティアサークルや嬉野市などが体験教室や大会などを定期的にかけて普及に力を入れている。ルールは簡単。だが、挑戦すると奥の深いボッチャの魅力を探った。

ボッチャは「ボール」を意味するイタリア語。脳性まひや四肢に障害がある人のスポーツとして欧州で始まり、国内の競技人口はまだ200人余りと少ない。赤いボールと青い

ボールを投げ合い、白いジャックボール（目標球）にどれだけ近づけるかで得点を競う。ルールが冬季競技のカーリングに似ているため「地上のカーリング」とも呼ばれている。パラリンピックでは1988年のソウル大会から正式採用された。

西九州大のボランティアサークル「ESRD」は、高齢者施設や児童福祉施設などと訪問交流活動を続けている。発足は15年前で、当初から「障害者と健常者が共に楽しめるスポーツ」としてボッチャを取り入れている。

公式審判員資格を取得する学生もいるほどの熱の入れようで、4年生の江口茂光さん（22）は「ボールを投げるだけで誰とでも楽しめる。県内でも普及しているとは言えないが、レクリエーションとしてどんどん広めたい」と話す。

記者も学生に交じってボッチャに初挑戦した。ボールを転がしたり、高く投げて目標地点に落としたり、投げ方を工夫して目標球付近を自分のボールで固めようとするが、思い通りには投げられずに惨敗。一球ごとに緊張感があり、何度も声を上げて盛り上がった。

嬉野市の観光・まちづくり団体「佐賀嬉野バリアフリーツアースセンター」は

「緑茶、紅茶、ボッチャ」を合言葉に、3年前から体験会や大会を開いている。

「障害者と健常者が同じルールで競い合えることが採用の最大の理由」と事務局長の吉川博光さん（44）。年3回ほどの体験会に50人を超える人が参加しているという。

市も協力し、公式球セットを貸し出している。吉川さんは「リオでの活躍でボッチャの知名度も高くなり良い機会。メダリストによる講習会も開いて、嬉野市をボッチャの聖地にしたい」と期待を膨らませる。

ボールを投げ入れるだけの競技だが、カーリングさながらの戦略性や駆け引きが面白い。ルールに基づき、誰でも平等な環境で競い合えるのも魅力だ。体験会に出掛けて、挑戦してみてはいかがだろうか。

ESRDのボッチャ体験教室は毎月第2土曜日の午後1時から、佐賀市の県総合福祉センターで開いている（12～2月は神埼市の西九州大神埼キャンパス体育館で）。

佐賀嬉野バリアフリーツアースセンターは10月16日、嬉野市ボッチャ大会を同市体育館で開催予定で、個人やチームの参加者を募集している。問い合わせは、ESRD＝0952（37）9281。佐賀嬉野バリアフリーツアースセンター＝0954（42）5126。

【ルールの補足】

- コート内の六つに仕切られたボックスから投球する。
- ボールは重さ263～287グラム、周長26.2～27.8センチの範囲で空気を抜いたり、表面にクリームを塗ったりして転がり具合を工夫できる。
- 赤（先攻）と青（後攻）が6球ずつ投げて1エンド終了。エンドは個人とペアは4回、チーム（3人以上）は6回。投球順はエンドごとに先攻、後攻が交代する。
- エンドの先攻が目標球を投げ、さらに先攻が赤ボールを投げる。続いて後攻が青ボールを投げ、以降は目標球に近い方が投げる。
- 障害で投げるのが困難な場合はランプ（勾配台）を使える。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

